

## 中内 哲 北九州市立大学法学部助教

審査委員ながら、今回の作品募集テーマ「ジェンダーとIT革命」は、極めて時宜を得ていて面白いと思えました。応募者の方々も、テーマに対して私と同じ感覚をもたれたのでしょう。一般の部・高校生以下の部とともに、前回を上回る数多くの力作が寄せられました。初めて審査委員に加わらせて頂いた者として、皆さんの作品を読み進めていく中、常日頃の生活ではそれほど強く意識しなかった様々な事柄について大いに勉強、あるいは考えさせられました。ありがとうございました。

受賞された個々の作品に対する評価は、野中ともよ審査委員長はじめ、他の委員の先生方が丁寧になさっておられるので、ここでは繰り返しません。審査の過程で全体として私が感じたことを二点述べることにします。

第一は、今回の応募作品が大きく二つに分類できるように思えることです。それは、①テーマに掲げられた「ジェンダー」と「IT（革命）」とを直接に結びつけて書こうとしたものと、②執筆者である個人がいかに「ジェンダー」に関わり「IT」にも関わっているかを綴ったものです。審査前、私は①ばかりを想定していたので、読み進めるうち②に含まれる作品が相当数あったことに正直少し驚きました。

でも、これは、「ジェンダー」と「IT」との関係が、最初に触れた今回テーマへの第一印象「面白さ」とは裏腹に、実は「なかなか思うほどに簡単には論じ切れない」ことの現れなのだと思ってきました。ジェンダーバイアスがかかった実生活にITはこれからどんどん入ってきます。それだけに（さらには、一般の部では「大賞」該当作品なしという大変残念な結果に至ったことも踏まえると）、今回のテーマは、今後の、

しかも不可避の課題として、私たち一人一人がずっと問い続けていくべきものなのです。

第二は、「ジェンダー」からイメージされる世界の広さです。前々から何となく思っていたことですが、作品を読ませて頂いて、また、審査会における委員の先生方とのディスカッションを通してあらためて認識しました。このことは、「ジェンダー」という言葉や概念が、これからさらに多くの人々・考え方との切磋琢磨を経ることによって、大いに発展・浸透していく可能性を有することの証左だといえます。

その意味で、高校生以下の部の優秀賞作品はじめ多数を応募して下さった福岡県立八幡高等学校が「ムーブ」ひまわり賞に選ばれたことは特筆すべきでしょう。なぜなら、きつと八幡高校の中で、男女を問わず多くの生徒達が今回のテーマについて盛んに話し合ったに違いないからです。

このような議論の場が、彼らのような若い世代だけでなく、あらゆるレベル・様々な規模で持たれることこそが、これからの「ジェンダー」論にとって大変重要なのだと思います。